

[1 2] 日向市小体連

(学校数 13校 児童数 3249人)

I 年間事業

実施日	事業名	主な内容	会場
4月14日(木)	市小体連第1回理事会	役員選出 年間計画 研究の進め方について	市教育研究所
4月28日(木)	県学体研日向大会 地区準備委員会	学体研日向大会について	市中央公民館
5月13日(金)	県小体連第1回評議員会	役員改選 計画・予算の承認 学体研日向大会について	県武道館
5月24日(火)	市小体連役員会	評議員会報告 学体研日向大会に向けて	日知屋小学校
5月26日(木)	県学体研実行委員会及び 開催地区実行委員会・ 県研究部会運営委員会	学体研日向大会について (役割分担等)	大王谷コミュニテ ィセンター
6月3日(金)	県小体連第1回理事会・ 専門部会	全大会及び分科会	県武道館
6月7日(火)	市小体連第2回理事会	県理事会、専門部会報告 学体研日向大会に向けて	市教育研究所
7月1日(金)	市小体連第3回理事会	学体研日向大会に向けて 市陸上大会に向けて	市教育研究所
7月12日(火)	県学体研県研究部会 運営委員会①	学体研日向大会に向けて	市中央公民館
8月19日(金)	県小体連第2回理事会・ 専門部会	全大会及び分科会	県武道館 (ZOOM 開催)
8月23日(火)	県学体研県研究部会 運営委員会②	学体研日向大会に向けて	市中央公民館
9月13日(火)	市小体連第3回理事会	学体研日向大会に向けて	市教育研究所
9月22日(木)	県学体研県研究部会 運営委員会③	学体研日向大会に向けて	市中央公民館
10月21日(金)	県学体研日向大会 事前授業研究会	事前授業研究会	サンドーム日向
11月10日(木)	市小体連第5回理事会 (新型コロナウイルス 感染拡大のため中止)	陸上大会前日準備 (新型コロナウイルスの感染 拡大のため中止)	大王谷陸上競技場
11月11日(金)	市陸上大会 (新型コロナウイルス 感染拡大のため中止)	大会運営 (新型コロナウイルスの感染 拡大のため中止)	大王谷陸上競技場
11月16日(水)	県学体研日向大会前日準備	前日準備・最終確認	サンドーム日向
11月17日(木)	第63回県学体研日向大会	大会運営	サンドーム日向
12月13日(火)	県学体研開催地区 実行委員会	学体研日向大会反省	市中央公民館

II 事業部のあゆみ

1 陸上大会（新型コロナウイルスの感染拡大のため中止）

- (1) 大会名 第51回日向市小学校陸上大会
- (2) 実施日 令和4年11月11日（金）
- (3) 会場 大王谷陸上競技場
- (4) 出場者 日向市内小学校6年生全児童（小規模校は5年生児童含む）
- (5) 実施種目 ○ 走り高跳び ○ 走り幅跳び ○ 50mハードル走
○ 短距離走（100m） ○ リレー（100m×4名）
○ 長距離走（男子1000m、女子800m） ○ ソフトボール投げ
- (6) 競技方法
 - ・ 選抜での出場はリレーを除き、1人1種目とする。
 - ・ 「走」競技は、スタンディングスタートとする。
 - ・ 靴は、普段体育で使用する運動靴とする。
 - ・ その他細部については、日向市小学校体育連盟による競技規則を適用する。

※ 今年度は3年ぶりとなる開催の方向で動いていたが、市内のコロナ感染の状況を鑑み中止せざるを得なかった。今年度も各学校での記録会とし、市小体連陸上大会規定に基づき各種目1位～3位までを表彰した。

III 研究部のあゆみ

1 研究主題・副題

生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる体育科学習の在り方
～主体的・対話的で深い学びの視点に立った体づくり運動の授業実践を通して～

2 主題設定の理由

日向市小体連では、令和元年度より3年間、体力向上プランで課題となっていた種目について改善を図るためには、日々の授業の中でどのような取組みや工夫を行えばよいかという視点で研究をしてきた。

指導法の改善や新たな教具等の購入によって、課題となっていた立ち幅跳び・ボール投げについては一定の改善が見られていたが、柔軟性と持久力の項目については平均を下回る結果が続いていた。

そこで今年度は、県学校体育研究発表大会の内容も兼ねて、ゴール型ゲームにおける体づくり運動に視点を当てて、児童が進んで体を動かし、運動する楽しさや目標を達成できた時の喜びを味わわせながら研究を行うことが、日向市の児童にとって最善だと考え本主題を設定した。

3 研究仮説

カリキュラム・マネジメントを意識した学習内容系統図を作成し、学習カードの作成やICT機器の活用などの授業改善・工夫を行えば、児童一人一人が進んで体を動かし、運動する楽しさを味わうことができるだろう。

4 研究内容

- (1) カリキュラム・マネジメント「学習内容系統図」の活用
- (2) 発達の段階に応じたICT活用の工夫

5 研究の実際

(1) カリキュラム・マネジメント「学習内容系統図」の活用について

主体的・対話的で深い学びを実現するためには、児童が「わかる」と「できる」を実感しながら学習を進めていくことが大切であり、そのためには技能習得の過程を通して思考力・判断力・表現力等を働かせて課題を解決していく過程が重要となる。そこで、日向市では右のような学習内容系統図（球技ゴール型）を作成し、児童が「いつ」「何を」「どのように学ぶのか」「何が身に付いたのか」の視点で計画を立てることで、1単位時間で学ばせる事柄を明確にし、系統立てて指導していくことができるようにした。また、県の研究に沿った「つながりのある学習」にも視点を向け、前の学年や次学年での指導内容を確認し、段階的な指導が行えるようにした。

このような指導と評価の系統図を活用したことで、指導経験の浅い先生でも、授業の要点や授業の組み立て方を理解し、見通しをもって授業を進めていくことができた。

学習内容系統図【球技 ゴール型】

第1学年及び第2学年 初級段階 基礎力	第3学年及び第4学年 中級段階 基礎力	第5学年及び第6学年 上級段階 基礎力	第7学年及び第8学年 上級段階 基礎力
○ 運動遊びの楽しさに触れる	○ 運動の楽しさや喜びに触れる	○ 運動の楽しさや喜びを味わう	○ 運動の楽しさや喜びを味わう
○ 行い方を知る	○ 行い方を知る	○ 行い方を理解する	○ 行い方を理解する
○ 楽しいゲームをする	○ 楽しいゲームをする	○ 技能を身に付け、簡易化されたゲームをする	○ 技能を身に付け、簡易化されたゲームをする
※ボールゲーム ・ 簡単なボール操作と攻め守りの動きによって、楽しいゲームをする 【例示】 ■・・・ボール操作 □・・・ボールを持たない動き ■ ねらったところに正確やかにボールを転がす、投げる、蹴る、的に当たる、得点する ■ 相手コートに正確やかにボールを投げ入れたり、捕ったりする ■ ボールを捕ったり止めたりする □ 広への移動	※ゴール型ゲーム ・ 基本的なボール操作とボールを持たないときの動きによって、楽しいゲームをする 【例示】 ■・・・ボール操作 □・・・ボールを持たない動き ■ 味方へのボールの手渡し、パス、シュート、ゴールへのボールの持ち込み □ ボール保持者と自分の間に守備者がいないように移動 □ ボール保持時に体をゴールに向けて	※ゴール型 ・ ボール操作とボールを持たない動きによって、簡易化されたゲームをする 【例示】 ■・・・ボール操作 □・・・ボールを持たない動き ■ 近くにいるフリーの味方へのパス ■ 相手に取られない位置でのドリブル ■ 得点しやすい場所への移動とパスを受けてからのシュート □ ボール保持者と自分の間に守備者が入らない位置へ移動する	※ゴール型 ・ ボール操作とボールを持たない動きによって、簡易化されたゲームをする 【例示】 ■・・・ボール操作 □・・・ボールを持たない動き ■ ゴールとゴールキーパーとの距離を詰める ■ マーク ■ 得点しやすい場所への移動とパスを受けてからのシュート □ ボール保持時に体をゴールに向けて

何を身に付けさせるのか？

(ゴールイメージ)

(2) 発達の段階に応じたICT活用の工夫について

運動のポイントや自分の課題を自ら理解し、自ら思考、チャレンジすることで、より深い「わかる」「できる」運動につながると考えた。そのために、タブレット端末を活用して、児童同士で話し合いや学び合いをさせたり、具体的なポイントを動画として確認させたりした。

各学校、ルール理解、視点の共有、ゴールイメージの明確化、動きのポイントの焦点化等に活用し、達成となる動きに近付くような工夫が挙げられた。また、自分の動きやチームとしての達成度等もデータとして残っていくため、成長の変化を見ていくこともでき、さらなる技能向上を目指して主体的に取り組む姿が見られるようになった。

タブレット端末は1人1台配当されており、体育学習に関心の高い児童の中には、休み時間にこれまでの記録を確認したり、次の時間の作戦を友達と一緒に話合ったりする姿も見られるようになり、体育学習に対する意欲の高まりも感じ取ることができた。

【写真①】



(ペアでの撮影とアドバイス)

【写真②】



(作戦ボードを使った話し合いの様子)

6 研究の成果と課題

(1) 成果

- 学習内容系統図を作成し活用したことで、身に付けさせたい内容や学年同士のつながりが明確になり、指導が行いやすくなった。
- 撮影した動画で、自分の動きを見返したり、友達にアドバイスをもらったりすることで、次の課題が明確になり、課題解決に向けて主体的に取り組もうとする姿を見取ることができた。

(2) 課題

- ICTをどの場面でのどのように活用するのか、より深い学びに与えるためにはどのような手立てが必要なのを考えていく必要がある。